

子どもの興味・関心、学ぶ理由、目標などは、成長とともに変化していきます。こうした子どもの発達段階や実態を踏まえて、各教師は自らの経験を基に、興味・関心を高めるための働きかけを行っていますが、授業の展開や学ぶ意欲をはぐくむための働きかけには、その教師なりの傾向や特徴があります。

学ぶ意欲をはぐくむ授業づくりを考える際に、p 5に示した「学ぶ意欲のプロセスモデル」が参考になります。学ぶ意欲が育つプロセスに着目し、その構成要素に意図的に働きかけることで、学ぶ意欲は向上するものと考えられます。「欲求・動機」「学習行動」「認知・感情」は密接に関わっているため、一つの働きかけが複数の要素に影響を与えることがあります。また、学ぶ意欲を高めようとして、授業のねらいの達成を目指すことから外れないように留意する必要があります。

そして、教師が子どもの学習の様子を見守りながら、状況に応じて教師による言葉かけを工夫したり、子ども自身による振り返りを行ったりすることが重要です。

（1）授業における働きかけ

学ぶ意欲のベースとなるのが、「知的好奇心」「有能さへの欲求」と言われています。この二つに働きかける授業を構成すれば、子どもは興味や関心をもって学習に取り組むことができると考えられます。

◆ 分かる授業ではぐくむ

学ぶ意欲をはぐくむ上で、「分かる授業」を行うことは必要不可欠です。教師の説明をよく聞いていれば理解できるという授業ばかりでなく、実験したり、考えたり、話し合ったりしていくうちに、「最初は分からなかったことが、分かった」といった場面を、多く設定することが大切です。子どもが体験や努力をして分かるような授業をすることにより、「もっと知りたい」「もっとできるようになりたい」などの欲求を引き出すことが可能になります。



◆ 実生活と関連する授業ではぐくむ

身近な事柄と関連のある授業は、子どもの興味・関心を高めます。また、学習したことが生活の中でどのように使われているかを考えさせたり、見つけたりさせることで、学習したことが生活に役立つことを実感できます。すると、学んだことを家庭で話題にしたり、再び学習に取り組んだりして、学びが深まっていくことが期待できます。

各プロセスへの働きかけ（例）

認知・感情への働きかけ

学習の成果の確認（充実感、おもしろさ・楽しさ）

・学習したことを作品、ポートフォリオなどにまとめさせ、学習の振り返りができるようにする。

ポジティブな個人内評価（有能感）

・教師から作品のよさ、個人内の伸びなどよい面への評価を与えるとともに、自己評価をさせる。

学習行動への働きかけ

応用・発展の課題（挑戦行動）

・応用・発展の課題を提示し、自分で工夫して学習させる。

学び合い、教え合いの場（深い思考）

・友達との考えを比較する場を設定し、様々な見方、考え方に気付かせる。

子どもが主体的に学ぶ場（自発学習、情報収集）

・課題や学習方法を選択させ、次第に自ら課題を見いだせるように指導する。

自己決定・自力解決の場（独立達成）

・目標を決めさせる。
・みんなで考えたことを元に、自分でまとめさせる。

欲求・動機への働きかけ

自分の特性や長所の自覚（向社会的欲求）

・様々な体験活動や自己評価・相互評価などを通して、自分の特性やよさに気付かせる。

児童期からのキャリア教育（向社会的欲求）

・社会で活躍する様々な人に目を向けさせ、夢や目標をもたせる。

めざす姿や作品の提示（有能さへの欲求）

・作品や演技など、めざす姿や形を例示し、実現のための具体策を考えさせたり、指導したりする。

学習の見通しをもたせる（有能さへの欲求）

・単元の学習の見通しをもたせて励まし、「自分にもやれそうだ。」というイメージを抱かせる。

子どもの生活実態と教材との関連

（知的好奇心）

・子どもの興味や日常生活と教材を関連付ける。

疑問や意外性を生み出すしかけづくり

（知的好奇心）

・「なぜ」「えっ、そうなの」など、疑問や意外性を感じさせる場面を設定する。

学
ぶ
意
欲

(2) 学習状況に応じた言葉かけ・振り返り

◆ 教師による言葉かけ

学習活動中のタイミングのよい励ましの言葉は、子どもに安心感を与え、学習の推進力となります。励ましを受けたことで、一人でやり遂げようとしたり、多くの問題に挑戦したり、別の方法で解こうとしたりするなど、自ら学習を進めていく力を得ることがあります。

また、授業の終わりや単元末では、子どもが「おもしろさ・楽しさ」「有能感」「充実感」などを感じられるように、肯定的な言葉かけをすることが大切です。

子どもは、その子なりの発想をもっており、それが認められることによって、知的好奇心が高まります。教師は個性的・多面的な発想を受け止め、認めるように心がけることが大切です。

効果的な言葉かけについて学ぶには、校内で授業を観察し合い、教師の言葉かけに対する子どもの反応等を、授業研究会等で話し合うことが有効です。

◆ 子どもの振り返り

子ども自身による振り返り（自己評価）では、適切な目標をもたせること、学習状況を適時に振り返らせることが大切です。このことが、「有能感」や「自分で自分を励ましながら学習する力」を育てることにつながります。

また、目標を明確にし、学習のゴールを意識させることで、「自分にもできそうだ」という見通しをもつことができるようになります。

小学校の高学年の頃から、子どもは徐々に客観的な自己評価ができるようになります。自分の学習状況をモニターして、うまくいっていない場合は軌道修正をし、目標が達成できるように学習を進めていく調整能力も発達してきます。中学生になると教科の得意・不得意がはっきりしてくるため、努力してもすぐにはよい結果を得られないことが増えてきます。そこで、昨日の自分と比べて、「努力してこれだけ伸びた」という実感、つまり、自己の成長に基づく有能感を大切にします。授業の振り返りをさせ、それに対して教師が共感、賞賛するなどして、適切に自己評価できるように支援していきます。

例えば、極端に自分に厳しい評価をする子どもには、「あなたは、～をがんばっていましたね。今日の目標は達成できましたね。」などと、教師が観察した学びのよさを伝えましょう。

教師による言葉かけと、子どもの振り返りの例を次に示します。実際の授業の場面では、このような言葉に授業の内容に関わる具体的な言葉が加わります。

教師による言葉かけ（例）

- ・よく考えたね。目の付け所がいいね。
- ・実におもしろい発想だね。なかなか思いつかないよ。
- ・その方法でいいよ。最後までがんばってみよう。
- ・すごいね。あなたは、〇〇が得意なのね。
- ・粘り強く取り組んだから、分かりやすくまとまったね。
- ・このグループは話合いで前向きな意見が出せたから、いい作品に仕上がったね。
- ・この調子で取り組めば、目標が達成できると思うよ。



「何がどのようによいかということ」を伝え続けると、子どもに適切な自己評価能力が身に付いていきます。

子どもの振り返り（例）

- ・自分で計画し、調べてまとめられた。
- ・友達に解き方を教えることができた。
- ・友達の助言を参考に書き直したら、分かりやすい文章になった。
- ・この部分はできななかったけれど、あと一歩だった。もう一度確認して、次はできるようにしよう。
- ・難しい問題があったけれど、最後まであきらめずにがんばれた。

自己強化

成長するにつれて、課題が難しくなるため、自分で自分を励まして学習していく力が必要になります。成功したときに自分をほめ、失敗したときに自分を励ます能力を高めるように支援することが大切です。心理学では、これを「自己強化」の能力と言います。

アトランタ五輪で、女子マラソンの有森裕子さんがゴールしたときにおっしゃった「自分を自分でほめてあげたい」の名言は、「自己強化」から生まれたものと考えられます。